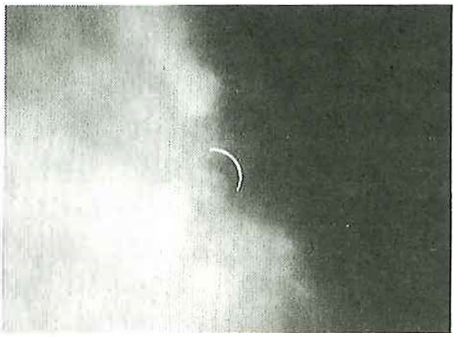
ルクセンブルグからフランスのメッツへ、細い細い太陽に出会う

木村　精二

イギリスでの日食を諦めた筆者（本誌99年No.2の拙文参照）は、口コミで身近な方々をお誘いした。”ルクセンブルグ近郊で皆既日食を見たあと、イギリスで自由行動をいかが。希望により、ロンドンでグリニッチ旧天文台など、バースではハーシェル博物館を訪ねたり、地方文化と夏の田園を楽しみませんか。往復は英国航空の早割り切符で ──”と。日を経ずして、10指を越す参加者が集まり、JTB 又は KNTから航空券を購入した。



10時31分(U.T.)KODAK GOLD 400
200mm 望遠　絞り5.6 1/500 秒

8月9日11時に成田を発ったBA6便は定刻15時30分にロンドン着。ターミナル4から1へ纏まって移動する日本人12名は、年令9歳から68歳、日食観測などの自主グループの面々である。17時25分発のBA418 便は、1時間後には人口僅か30万という超小国ルクセンブルグ大公国の上空へ、そして、同名の首都に到着、タクシーに分乗して10分足らず、中心街のホテルにチェックイン、旅装を解いた。ここは、憲法広場の前にあってペトリュッス渓谷が下に見渡せる瀟洒なクラバットという部屋数は59、こじんまりしたホテルである。

翌10日7時、味自慢の薄切り生ハムをはじめ質、量ともたっぷりの朝食のあとは、地方見学を兼ねた観測地の下見行き。手配してあったミニバスの代わりに配車されて来た大型バスで出発、まずは、中央駅隣接の売店で地図を入手した。曇り空から急に大粒の雨が落ちて、すぐに止んだ。昨晩通って来た空港を右後方に見送り、東へ20㌔、ドイツとの国境、モーゼル河沿岸のレミッヒ市に着いた。運転手の言葉通り、待っていたミニバスに乗り換えて、南へ向かう。ワイン・ロード沿いの葡萄畑を見ながら数㌔、モンドルフと呼ぶ町からフランス共和国に入った。国の境を示す標識が幾つか目に入るが、出入国手続きはまったく無し。日本の県境を越すのと変わらない。 A31号という幹線を南へ約30㌔、メッツ(METZ)市内に入った。大学・オペラ劇場・修理中の聖堂が川沿いにある落ち着いた魅力的な街のようである。ここは既に皆既日食中心線を南に何㌔か越えている。1時間半ほど昼食と自由散策に充てる。フランス通貨の手持ちが無くて結構、支払いはカードで、と言うが、「アメリカン・エキスプレスは駄目」、なぜかレストランのおばさんが叫んだ。

キャンピングのテントが点在する河原の近くと、人影のない墓地近くの空き地、観測候補地を2箇所選んだ後、来た道を数㌔戻る。ほぼ中心線上である。A31 号と交差し、皆既中心線に平行して、ほぼ東西に走る A4 号高速道路を左手、つまり西へしばらく行くと、”AUCHEN”と大きな看板を掲げたスーパーマーケットとその広い駐車場が目に付いた。「あそこがいい」「第1候補地は、ここに決めよう」。一周して A31号線に戻った。

ルクセンブルグ市に帰り、渓谷に懸けられた高さ46㍍のアドルフ橋やノートルダム寺院などを一目見てから、ホテル・クラバットに入った。休憩のあと、揃って前祝いの夕食。ワインは老夫妻のプレゼントである。さあ、明日はいよいよ日食の日を迎える。

一夜開けて、本番の朝が来た。某天文誌の編集長あてにファックスを打つ。「こちらは日本からの自主グループ（代表：成田広）、今からホテルを出発して皆既中心線に向かう

ところ。天気は晴れたり曇ったり、一行のうち半数は初めての体験で、雲の動きに一喜一憂しています。・・観測終了後はフランスから戻り、結果を報告しましょう。・・」

前夜の相談どおり、ちょうど8時（現地夏時刻、世界時はマイナス2時間）に出発。前日選んだ目的地までは30キロ余り、途中ほとんど混雑に遇わず、1時間ほどで到着する。四方とも見晴らしの良い場所が、容易に得られた。その地名はメッツ郊外の SEMÉCOURT、東経6°09′北緯 49°11′。ほとんど皆既中心線上だ。三脚付きの赤道儀式屈折望遠鏡とVTRカメラを持参したのは、同上の成田代表のみ。あとは、双眼鏡が数台に、200ミリ望遠に軽三脚、普通のカメラ、気温測定装置 ――日食観測機材は、以上の通りである。

11時9分の第1接触は雲の中。11時15分、スーパーから買い物を終えて帰り道のお仲間から「あ、欠けている」の声。雲を通して、肉眼でも太陽の右肩が確かに欠けているのが認められたのである。しかし、その後は食分のすすむにつれて、雲も厚くなっていく。12時20分、皆既の8分前。同27分「はい、第2接触の1分前です」の声。辺りは急激に暗くなる。そして28分、間もなく皆既！ ―― 136 秒間の皆既日食は、雲の中で終わった。

12時30分06秒、第3接触の予報時刻。それから数十秒ほど過ぎて、まったく予期しないことが起きた。「ア、見える。見える」の声、いや叫び声が我がグループの中から発せられたのである。手持ちの 200ミリが空に向いた（写真参照）。皆既日食前の「曇っていても、ダイヤモンドリングが見えるかも知れない ―」という予言は的中しなかったが、雲の間から、細い細い月、いや、ダイヤモンドリングの終わった後の太陽の光芒が、眩しく目を射ったのだ。そして、13時51分の第4接触までの1時間有余、欠けた太陽は、数回ほど姿を見せてから、厚い雲に隠れた。「見えて良かった、本当に。短かかったけど」。

その夜、一行はルクセンブルグの空港へ。銀行は無い、何ヵ月も前に営業を廃止した、という。BA 419便で一路ロンドンに向かう。ヒースロー空港着は21時、ハイド・パークに近い我が常宿に入った。天文誌に約束したファックスの文面に曰く、「・・糸のような弧を描いた明るい、いや全身を射るような眩しい太陽、・・正にダイヤモンドの名に相応しい天からの無償の授かり物に、一同は深い感動を覚えました」。翌日から自主グループの名に恥じず、自由行動が始まる。

ロンドン2泊が4人、3泊が8人。バース着は13日が4人、14日2人プラス5人（後者はルーマニア日食のあとパリーとロンドン経由で合流）、15日3人、16日には湖水地方まで足を延ばした3人が到着したのである。

―後日談は、機会を改めねばなるまい。

フランス国メッツ郊外の自主グループ